

冬

芥川龍之介

青空文庫

僕は重い外套がいとうにアストラカンの帽をかぶり、市ヶ谷いちやの刑務所へ歩いて行つた。僕の従兄とくは四五日前にその刑務所にはいつていた。僕は従兄を慰める親戚総代にほかならなかつた。が、僕の気もちの中には刑務所に対する好奇心もまじつていることは確かだつた。

二月に近い往来は売出しの旗などの残つていたものの、どこの町全体も冬枯れていた。

僕は坂を登りながら、僕自身も肉体的にしみじみ疲れていることを感じた。僕の叔父おじは去年の十一月に喉頭癌こうとうがんのために故人になつていた。それから僕の遠縁の少年はこの正月に家出していた。それから——しかし従兄の収監しゅうかんは僕には何よりも打撃だつた。僕は従兄の弟と一しょに最も僕には縁の遠い交渉を重ねなければならなかつた。のみならずそれ等の事件にからまる親戚同志の感情上の問題は東京に生まれた人々以外に通じ悪いこだわりを生じ勝ちだつた。僕は従兄と面会した上、ともかくどこかに一週間でも静養したいと思わずにはいられなかつた。……

市ヶ谷の刑務所は草の枯れた、高い土手をめぐらしていた。のみならずどこか中世紀じゆじみた門には太い木の格子戸の向うに、霜に焦げた檜ひのきなどのある、砂利を敷いた庭を透かしてゐた。僕はこの門の前に立ち、長い半白はんぱくの髭ひげを垂らした、好人物らしい看守かんしゆに名刺

を渡した。それから余り門と離れていない、庇に厚い苔の乾いた面会人控室へつれて行つて貰つた。そこにはもう僕のほかにも薄縁りを張つた腰かけの上に何人も腰をおろしていた。しかし一番目立つたのは黒縮緬の羽織をひつかけ、何か雑誌を読んでいる三十四五の女だつた。

妙に無愛想な一人の看守は時々こう云う控室へ来、少しも抑揚のない声にちようど面会の順に当つた人々の番号を呼び上げて行つた。が、僕はいつまで待つても、容易に番号を呼ばれなかつた。いつまで待つても——僕の刑務所の門をくぐつたのはかれこれ十時になりかかつていた。けれども僕の腕時計はもう一時十分前だつた。

僕は勿論腹も減りはじめた。しかしそれよりもやり切れなかつたのは全然火の気と云うもののない控室の中の寒さだつた。僕は絶えず足踏みをしながら、苛々する心もちを抑えっていた。が、大勢の面会人は誰も存外平氣らしかつた。殊に丹前を二枚重ねた、博奕打ちらしい男などは新聞一つ読もうともせず、ゆつくり蜜柑ばかり食いつづけていた。しかし大勢の面会人も看守の呼び出しに来る度にだんだん数を減らして行つた。僕はどうどう控室の前へ出、砂利を敷いた庭を歩きはじめた。そこには冬らしい日の光も当つているのに違ひなかつた。けれどもいつか立ち出した風も僕の顔へ薄い塵を吹きつけて来る

のに違ひなかつた。僕は自然と依怙地になり、とにかく四時になるまでは控室へはいるまいと決心した。

僕は生憎^{あいにく}四時になつても、まだ呼び出して貰われなかつた。のみならず僕より後に来た人々もいつか呼び出しに遇つたと見え、大抵^{だいてい}はもういなくなつていた。僕はとうとう控室へはいり、博奕^{はくぎ}打ちらしい男にお時宜^{じぎ}をした上、僕の場合を相談した。が、彼はにこりともせず、浪花節語^{なにわぶしきた}りに近い声にこう云う返事をしただけだつた。

「一日^{いちんち}に一人^{ひとり}しか会わせませんからね。お前^{まえ}さんの前に誰か会つているんでしよう。」

勿論こう云う彼の言葉は僕を不安にしたのに違ひなかつた。僕はまた番号を呼びに來た看守に一体^{いとこ}従兄^{いとこ}に面会することは出来るかどうか尋ねることにした。しかし看守は僕の言葉に全然返事をしなかつた上、僕の顔も見ずに歩いて行つてしまつた。同時にまた博奕打ちらしい男も二三人の面会人と一しょに看守のあとについて行つてしまつた。僕は土間^{どま}のまん中に立ち、機械的に巻煙草に火をつけたりした。が、時間の移るにつれ、だんだん無愛想^{あいそう}な看守に対する憎しみの深まるのを感じ出した。（僕はこの侮辱^{ぶじょく}を受けた時に急に不快にならないことをいつも不思議に思つてゐる。）

看守のもう一度呼び出しに來たのはかれこれ五時になりかかつていた。僕はまたアスト

ラカンの帽をとつた上、看守に同じことを問い合わせようとした。すると看守は横を向いたまま、僕の言葉を聞かないうちにさつさと向うへ行ってしまった。「余りと言えば余りとは実際こう云う瞬間の僕の感情に違ひなかつた。僕は巻煙草の吸いさしを投げつけ、控室の向うにある刑務所の玄関げんかんへ歩いて行つた。

玄関の石段を登つた左には和服を着た人も何人か硝子窓ガラスの向うに事務を執つていた。僕はその硝子窓をあけ、黒い紺つきを着た男に出来るだけ静かに話しかけた。が、顔かお色いろの変つていることは僕自身はつきり意識していた。

「僕はTの面会人です。Tには面会は出来ないんですか？」

「番号を呼びに来るのを待つて下さい。」

「僕は十時頃から待つています。」

「そのうちに呼びに来るでしょう。」

「呼びに来なければ待つてゐるんですか？　日が暮れても待つてゐるんですか？」

「まあ、とにかく待つて下さい。とにかく待つた上にして下さい。」

相手は僕のあはれでもするのを心配してゐるらしかつた。僕は腹の立つてゐる中にもちよつとこの男に同情した。「こつちは親戚総代になつていれば、向うは刑務所総代になつ

て いる、」—— そん な 可笑 しさ も 感じ ない の で は なかつた。

「もう 五時 過ぎ に なつて い ま す。面会だけ は 出 来る よう に 取り計つて 下さ い。」

僕は こ う 言い 捨て た なり、ひとま ず 控室へ 帰る こと に し た。も う 暮れ かかつた 控室の 中 には あ の 丸 髪まるまげ の 女 が 一 人、今 度 は 雜誌を 膝の 上 に 伏せ、ち ゃんと 顔を 起して いた。ま と もに 見た 彼女 の 顔は ど こか ゴシツクの 彫刻らしかつた。僕は この 女の 前 に 坐り、未だに 刑務所 全体 に 対する 弱者 の 反感を 感じて いた。

僕の やつと呼び出されたのは かれこれ 六時 に な りかかつて いた。僕は 今度 は 目の くりく りした、機敏らしい 看守かんしゆ に 案内され、やつと 面会室の 中 に は いる こと に なつた。面会室 は 室と 云う もの の、精々 二三 尺 四方 ぐら い だ つた。のみならず 僕の は い つた ほかにも ベンキ塗りの 戸の 幾つも 並んで いる のは 共同便所 に そ つくり だ つた。面会室の 正面 に これも 狹い 廊下ろうか 越しに 半月形はんげつがた の 窓 が 一 つ あり、面会人 は この 窓の 向う に 顔を 頸あら わす 仕組み になつて いた。

従兄いとこ は この 窓の 向う に、—— 光の 乏しい 硝子窓ガラス の 向う に 円まると 肥つた 顔を 出した。し かし 存外ぞんがい 変つてい ない こ と は 幾分か 僕を 力丈夫に し た。僕等は 感傷主義まじ を 交え ず に 手短かに 用事 を 話し合つた。が、僕の 右隣り に は 兄に 会いに 来たらしい 十六七の 女 が 一人と め

どなしに泣き声を洩らしていた。僕は従兄と話しながら、この右隣りの泣き声に気をとめない訣には行かなかつた。

「今度のことは全然冤罪ですから、どうか皆さんにそう言つて下さい。」

従兄は切り口上にこう言つたりした。僕は従兄を見つめたまま、この言葉には何とも答えなかつた。しかし何とも答えなかつたことはそれ自身僕に息苦しさを与えない訣には行かなかつた。現に僕の左隣りには斑らに頭の禿げた老人が一人やはり半月形の窓越しに息子らしい男にこう言つていた。

「会わずにひとりでいる時にはいろいろのことを思い出すのだが、どうも会うとなると忘れてしまつてな。」

僕は面会室の外へ出た時、何か従兄にすまなかつたように感じた。が、それは僕等同志の連帶責任であるようにも感じた。僕はまた看守に案内され、寒さの身にしみる刑務所の廊下を大股に玄関へ歩いて行つた。

ある山の手の従兄の家には僕の血を分けた従姉^{いとこ}が一人僕を待ち暮らしているはずだつた。僕はごみごみした町の中をやつと四谷見附の停留所へ出、満員の電車に乗ることにした。

「会わずにひとりいる時には」と言つた、妙に力のない老人の言葉は未だに僕の耳に残つ

ていた。それは女の泣き声よりも一層僕には人間的だつた。僕は吊り革につかまつたまま、夕明りの中に電燈をともした麴こうじまち町の家々を眺め、今更のように「人さまざま」と云う言葉を思い出さずにはいられなかつた。

三十分ばかりたつた後のち、僕は従兄の家の前に立ち、コンクリイトの壁についたベルの鈕ボタンへ指をやつていた。かすかに伝わつて来るベルの音は玄関の硝子戸ガラスの中に電燈をともした。それから年をとつた女中が一人細目に硝子戸を開けて見た後のち、「おや……」何とか間投詞かんとうを洩らし、すぐに僕を往来に向つた二階の部屋へ案内した。僕はそこのテエブルの上へ外套がいとうや帽子を投げ出した時、一時に今まで忘れていた疲れを感じずにはいられなかつた。女中は瓦斯暖炉ガスだんろに火をともし、僕一人を部屋の中に残して行つた。多少の蒐集癖あつしゅひきを持つていた従兄はこの部屋の壁にも二三枚の油あぶらえ画や水彩すいさいが画をかけていた。僕はぼんやりそれらの画えを見比べ、今更のように有為転変ういてんぺんなどと云う昔の言葉を思い出していた。

そこへ前後してはいつて来たのは従姉や従兄の弟だつた。従姉も僕の予期したよりもずっと落ち着いているらしかつた。僕は出来るだけ正確に彼等に従兄の伝言を話し、今度の処置を相談し出した。従姉は格別積極的にどうしようと云う気も持ち合せなかつた。のみならず話の相間あいまにもアストラカンの帽をとり上げ、こんなことを僕に話しかけたりした。

「妙な帽子ね。日本で出来るもんじやないでしよう?」

「これ? これはロシア人のかぶる帽子さ。」

しかし従兄の弟は従兄以上に「仕事師」だけにいろいろの障害を見越していた。

「何しろこの間も兄貴の友だちなどは××新聞の社会部の記者に名刺を持たせてよこすんです。その名刺には口止め料金のうち半金はんきんは自腹じらを切つて置いたから、残金を渡していくと書いてあるんです。それもこつちで検けんべて見れば、その新聞記者に話したのは兄貴の友だち自身なんですからね。勿論半金などを渡したんじゃない。ただ残金をとらせによこしているんです。そのまた新聞記者も新聞記者ですし、……」

「僕もとにかく新聞記者ですよ。耳の痛いことは御免ごめんこうむ蒙りますかね。」

僕は僕自身を引き立てるためにも常談じょうだんを言わずにいられなかつた。が、従兄の弟は酒気を帶びた目を血走らせたまま、演説でもしているように話しつづけた。それは実際常談さえうつかり言われない権幕けんまくに違ひなかつた。

「おまけに予審判事よしんばんじを怒おこらせるためにわざと判事をつかまえては兄貴を弁護する手合いもあるんですからね。」

「それはあなたからでも話して頂ければ、……」

「いや、勿論そう言つてゐるんです。御厚意は重々感謝しますけれども、判事の感情を害すると、反つて御厚意に背きますからと頭を下げて頼んでいるんです。」

従姉は瓦斯暖炉の前に坐つたまま、アストラカンの帽をおもぢやにしていた。僕は正直に白状すれば、従兄の弟と話しながら、この帽のことばかり気にしていた。火の中にでも落されてはたまらない。——そんなことも時々考えていた。この帽は僕の友だちのベルリンのユダヤ人町を探がした上、偶然モスクヴァへ足を伸ばした時、やつと手に入れることの出来たものだつた。

「そう言つても駄目ですかね？」

「駄目どころじやありません。僕は君たちのためを思つて骨を折つていてやるのに失敬なことを言うなど來るんですから。」

「なるほどそれじやどうすることも出来ない。」

「どうすることも出来ません。法律上の問題には勿論、道徳上の問題にもならないんですからね。とにかく外見は友人のために時間や手数をつぶしている、しかし事実は友人のために陥し冤を掘る手伝いをしている、——あたしもずいぶん奮闘主義ですが、ああ云うやつにかかつては手も足も出すことは出来ません。」

こう云う僕等の話の中に俄かに僕等を驚かしたのは「T君万歳」と云う声だつた。僕は片手に窓かけを挙げ、窓越しに往来へ目を落した。狭い往来には人々が大勢道幅一ぱいに集つていた。のみならず××町青年団と書いた提灯ちようちんが幾つも動いていた。僕は従姉たちと顔を見合せ、ふと従兄には××青年団長と云う肩書もあつたのを思い出した。

「お礼を言いに出なくつちやいけないでしようね。」

従姉はやつと「たまらない」と云う顔をし、僕等二人を見比べるようになつた。

「何、わたしが行つて来ます。」

従兄の弟は無造作むぞうさにさつさと部屋を後ろにして行つた。僕は彼の奮闘主義にある羨しさうらやましさを感じながら、従姉の顔を見ないように壁の上の画などを眺めたりした。しかし何も言わずにいることはそれ自身僕には苦しかつた。と云つて何か言つたために二人とも感傷的になつてしまふことはなおさら僕には苦しかつた。僕は黙つて巻煙草に火をつけ、壁にかけた画の一枚に、——従兄自身の肖像画に遠近法の狂いなどを見つけていた。

「こつちは万歳どころじやありはしない。そんなことを言つたつて仕かたはないけれども

……

従姉は妙に空そららしい声にとうとう僕に話しかけた。

「町ちょうない内うちではまだ知らずにいるのかしら？」

「ええ、……でも一体どうしたんでしょう？」

「何が？」

「Tのことよ。お父さんのこと。」

「それはTさんの身になつて見れば、いろいろ事情もあつたろうしさ。」

「そうでしようか？」

僕はいつか苛立たしさを感じ、従姉に後ろを向けたまま、窓の前へ歩いて行つた。窓の下の人々は不相変あいかわらず万歳の声を挙げていた。それはまた「万歳、万歳」と三度繰り返して唱えるものだつた。従兄の弟は玄関の前へ出、手ん手に提ちょうどちん灯とうをさし上げた大勢おおぜいの人々にお時宜じぎをしていた。のみならず彼の左右には小さい従兄の娘たちも二人、彼に手をひかれたまま、時々取つてつけたようにちよつとお下げさの頭を下げたりしていた。……

それからもう何年かたつた、ある寒さの厳しい夜、僕は従兄の家の茶の間に近頃始めた薄荷パイプはつかを啣くわえ、従姉と差し向いに話していた。初七しち日ひを越した家の中は気味の悪いほどもの静かだつた。従兄の白木の位牌しらきの前には燈心とうしんが一本火を澄ましていた。そのまた位牌を据えた机の前には娘たちが二人夜着よぎをかぶつていた。僕はめつきり年をとつた従

姉の顔を眺めながら、ふとあの僕を苦しめた一日の出来事を思い出した。しかし僕の口に
出したのはこう云う当たり前の言葉だけだった。

「薄荷パイプを吸つていると、余計寒さも身にしみるようだね。」

「そうお、あたしも手足が冷えてね。」

従姉は余り気のないように長火鉢の炭などを直していた。……

（昭和二年六月四日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行
1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつけています。

入力・j.utiyama

校正・もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

冬

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>